

	学校名: 佐渡市立佐和田中学校	
	氏名: 増田 有貴	● 実践教科等: 総合的な学習の時間
		● 時間数: 9時間
		● 対象生徒: 3学年
THAILAND	[担当教科: 英語、家庭]	● 対象人数: 81人

1 単元名

考えよう！持続可能な社会の実現のために、私たちができること
～タイにおける国際協力から佐渡の未来を考える～

2 単元の目標

- (1) 国際社会で活躍する人々や、佐渡の地域おこし協力隊の生き方や考え方を知り、自らの行動に活かしたり、社会貢献をしようとしたりする。【進んで参加する態度】
- (2) 国際協力の必要性やあり方、日本の役割について理解を深める。【つながりを尊重する態度】
- (3) 国際社会の中で相互依存の関係であることを理解しながら、互いに助け合い共生する心を養う。【他者と協力する態度】
- (4) タイにおける諸問題から佐渡の現状と将来を考え、持続可能な社会の実現のために、課題解決策を提案することができる。【批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- (1) 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- (2) 子どもの多様な考えを引き出す
- (3) 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- (4) 考えるための材料を見極めて提出する
- (5) すべ・手だては活動に埋め込むなど工夫する
- (6) 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- (7) 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1) 教材観

本単元では、“Think Globally, Act Locally”をキーワードに、タイの諸問題から国際協力・開発の必要性やあり方、日本の役割について理解を深め、そこから持続可能な社会の実現のために地元・佐渡の現状と将来について考える。最終的には「20年後、地域住民が輝いている佐渡にするために、できること」を提案し、行動しようとする態度の育成を目標とする。授業では、中進国タイが抱える高齢化や都市部と貧困地域の格差問題を切り口に、様々な国際協力・支援について考えた上で、身近な国際貢献として、途上国の課題解決のために取り組む地元企業について紹介する。その後、スラム出身で外交官になったオラタイさん、青年海外協力隊・シニアボランティアとして活躍する方々の取組や思い、やりがいなどに焦点を当て、社会貢献活動について考えを深めていく。そして後半には、佐渡の地域おこし協力隊から、自身の活動や経験を通して見た「佐渡の魅力や強み、課題、今後の可能性」を講話いただき、生徒の課題発見や、実際に行動する意欲へと繋げたい。本単元は全9回の授業で構成されているが、国際的な話題が、生徒の実生活からかけ離れたものと捉えさせないために、身近な話題と結びつけたり、現地で活動する日本人の活躍や日本との共通点などを提示したりしながら、「世界の問題」を「自分の問題」として考える場を与えたい。将来的には佐渡だけでなく国際的な視野で日本や世界の現状を見つめ、長期的な課題について考えようとする意欲を喚起したい。

(2) 児童生徒観

本学年の生徒は、5月に「世界一大きな授業」に取り組み、世界の識字率や教育の実態、負の連鎖、マラさんの人生について学んでいる。また、9月上旬に上越教育大学教職大学院の原研究チームを迎え、異文化理解のワークショップも経験している。ワークシートの記述や授業の様子から、ほとんどの生徒は、国際問題の深刻さや異文化理解の重要性を理解できているものの、自分の身近なこととして捉えるまでには至っていない。

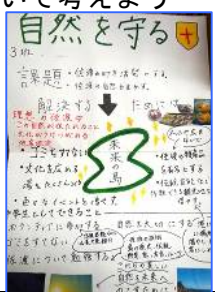
また、生徒は、11月に地域貢献・課題解決として、高齢化のためシャッター街となってしまう校区内にある河原田商店街の活性化を図るため、パンフレット作りを行う。そして12月には、将来の夢ややりたい自分を文章にまとめた「夢作文」を作成し、進路実現へと繋げていく。本単元での学びや知見が、その後の地域貢献活動への意欲につながり、更には自己の将来について向き合ったときに、何かしらの形で世界と繋がりをもったり、誰かに役立つ自分をイメージしたりしながら、進路について考えてほしいと願う。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解
評価規準	- 様々な国際協力や国際社会で活躍する人々の生き方を知り、自らの社会貢献への意欲をもつ。 - 異文化や国際協力を理解しようと意欲的に活動や話し合いに参加している。	- 国際協力の必要性やあり方、日本の役割について自分の見解をもつことができる。 - 課題解決の方法について考察し、自分の言葉で他者に伝えるように発表できる。 - 佐渡において、持続可能な社会の実現のための課題解決法を提案することができる。	- 発展途上国の課題や国際協力についての知識を身につけている。 - 国際社会の中で、日本は諸外国と相互依存の関係にあることを理解している。 - 写真や資料から必要な情報を読み取ることができる。
評価方法	学習の様子・活動への参加態度・発言・ワークシートの記述		

6 単元の構成

時 限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界を知ろう ～モノの動きと 繋がりを考えよう～  アヒルのおもち 相互依存度神経衰弱 (JICA 作成)	自分たちの日常生活は世界中の国々から支えられていることに気づき、諸外国とどのように相互依存の関係にあるかを理解する。	① クイズ「アフリカとつながりのあるものを選ぶ」に取り組み、日常生活で馴染みのあるものが、途上国からの輸入であることを知る。 ② ワークショップ「相互依存度神経衰弱」を通して、製品と原料、産地を知ること、私たちの日常生活（食・モノ）が、世界中の国々から支えられていることに気づく。 ③ タイのエビの輸入を例に、自分たちの消費行動と生活様式が、相手国の環境問題にも影響することを考える。
2	タイってどんな国？タイの魅力を考えよう  フォトランゲージ	- タイの位置、気候、生活、文化、国民性等に興味、関心をもつ。 - タイの地理、文化、生活に関するフォトランゲージを通して、タイの魅力や強みについて理解する。	① 班ごとに、タイについて思いつくキーワードを考え、共有する。 ② クイズや写真、映像を通して、タイの基本知識を身につける。（位置、生活、文化、言語、等） ③ 各班に異なる種類の写真2枚を配布し、そこから読み取れることを推測しながらストーリーを作り、発表する。（タイを中心とした東南アジアの地図、電車の僧侶優先席写真と女性が僧侶にお祈りをしている写真、等）
3	国際協力について考えよう  JICAの仕事 ①技術協力 ②有償資金協力 ③無償資金協力 ④市民参加協力 ⑤国際緊急援助	- データや写真から、タイの現在の課題を知り、国際協力の必要性を実感する。 - タイにおけるJICAの様々な支援を知り、それらを分類分けすることで、持続可能な発展と国際協力のあり方について理解する。	① タイの高齢化を示すグラフや、バンコクと貧困地域を比べた写真から、現在のタイの課題を読み取る。 ② 日本が諸外国を支援する理由と、JICAの事業概要を理解する。 ③ JICAによる支援を表す写真6枚（技術協力、有償資金協力、無償資金協力）を用いて、支援の目的を考えながら分類分けする。
4	身近にある国際協力について知ろう	- 中小企業海外展開支援事業の意義や可能性、国際社会の中での日本の役割と相互依存性について理解を深める。 - 地元の中小企業の国際貢献の取組を知り、国際協力が身近であることを実感する。	① APCD（アジア太平洋障害者センター）と山崎製パンの協働事業とその成り立ちを知り、本事業の意義を理解しながら、相互依存の関係性について考える。 ② JICAの民間連携事業を理解する。新潟県の中小企業の売り・強み、途上国の課題、事業内容、がそれぞれ書かれているカードを組み合わせるワークを通して、事業内容を理解する。 ③ 事業のメリット・デメリットを考え、日本の役割や支援のあり方について理解を深める。
5	「アクションを起こす人たち、	アクションを起こすことで人生を変えた人たちの生き	① スラム出身で外交官になったオラタイさんの人生を紹介し、貧困の負の連鎖を断ち切るも

	そこから変わる世界について考えよう	方を知り、教育がもつ可能性や、目標をもち行動を起こすことの重要性に気づく。 ●未来ブラリーの改修エピソードから、相互依存・共生社会であることを実感するとともに、社会貢献をしようとする意欲をもつ。	のは何かを考える。(「教育の機会」、「学ぶ意欲」、「機会を逃さない行動力」) ② オラタイさんが学んだ図書館の改修は、スラムに住む人々の慈善募金と、それに感銘を受けた日本人との繋がりによることを知り、タイ人の国民性や相互依存、共生社会を実感する。
	 Library 図書館 Scholarship 奨学金 Mobile Library 移動図書館 Dormitory 学生寮		
6	地域おこし協力隊から見た「佐渡の今」と「佐渡のこれから」について考えよう	●地域おこし協力隊から見た佐渡の魅力や強みを聞き、自己有用感を高める。 ●佐渡の高齢化による商店街の課題を理解し、今後の佐渡の可能性や地域活性化のための取組を知る。	河原田商店街で地域の活性化のために活動している地域おこし協力隊による講演。 ① 協力隊から見た佐渡の魅力や強みを知る。 ② 現在の佐渡の課題や今後の目標などを聞き、佐渡の可能性を知る。(高齢化がもたらしたものとシャッター街の現状。佐渡を活性化させるための若者の取組、今後の可能性、など。) ③ 現在取り組んでいる持続可能な課題解決法は何かを理解する。
7 8 9	佐渡の将来について考えよう 	●地域の写真から、『佐渡未来ストーリー』を作る活動を通して、地域の課題や課題解決策を考え、理想の街を描く。 ●「20年後、地域住民が輝いている佐渡にするために、できること」を具体的に考え、ポスターにまとめ、発表する。	① 班で、「20年後も地域住民が輝いている佐渡にするために、できること」を考え、『佐渡未来ストーリー』を作る。各班に配布された15枚の写真から、4枚程度選び、佐渡の強み・売り、佐渡の課題を考える。『ア佐渡の課題 イ理想の佐渡 ウ課題解決策 エ中学生としてできること』について意見を出し合い、ポスターにまとめる。 ② クラスを解体して、班ごとに発表する。発表の内容について、相互評価する。
	【地域貢献活動】 河原田商店街活性化のために、パンフレットを作ろう (地域おこし協力隊とのコラボ企画) 商店街パンフレット企画テーマ お店のお宝(光る原石)を見つけよう!	●河原田商店街のインタビュー活動やパンフレット記事作りを通して、地域の課題を自分事として捉え、地域活性化のために主体的に行動しようとする態度を養う。 ●地域おこし協力隊と共に取り組むことで、自らの行動が地域貢献に繋がることを実感すると共に、自己有用感を高める。	① インタビューやパンフレット作りを行うことで期待できることを考える。 ② 各班の興味・関心に応じてインタビューを行う店舗を決定する。その後、質問を考える。 ③ インタビューの仕方(会話の広げ方)、写真の撮り方などを学ぶ。河原田商店街でインタビュー活動を行う。 ④ インタビュー内容をもとに、店の情報やお宝、魅力など、それぞれが感じたことを記事にまとめる。



7 授業事例の紹介

小单元名【 身近にある国際協力について知ろう 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月7日(金)第5限

(イ)実施会場 3年2組教室

(ウ)本時の目標

- 中小企業海外展開支援事業の意義や可能性、国際社会の中での日本の役割と相互依存性について理解を深める。
- 地元の中小企業の国際貢献の取組を知り、国際協力が身近であることを実感する。

(エ)指導のポイント

本時では、中小企業海外展開支援事業に焦点を当て、地元新潟県の企業の活動や取組についてワークを通して理解する。身近にある企業が、独自の技術を生かして国際協力を行っていることを知ることで、地元新潟に自己有用感をもつとともに、国際社会の中での日本の役割を考える機会としたい。

また、国際協力が、途上国の課題と企業の強み・売りとマッチするものであることも

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

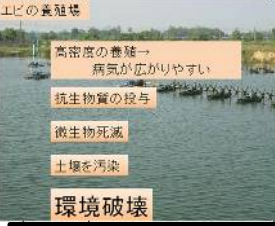
気付かせたい。そのために、カードを使ったワークでは、「ア. 中小企業名と会社の売り・強み イ. 途上国の課題、国名と国旗 ウ. 取組内容」に分けられたカードを班で読み込み、一致させていく。各企業の技術が、途上国のどのような課題を解決しようとしているのかを考える事で、それぞれの事業の意義を考える際のヒントとしたい。そして、各事業が、企業と対象国にとってそれぞれ何がプラスなのかを話し合わせることで、国際協力が一方通行ではなく、win-winの関係であることを理解させたい。

更に、国際協力は成功事例だけではないことを気づかせるために、事業のプラス面を出した後、「もし課題があるとすれば何があるか」と問いかける。生徒の批判的な思考を促し、多様な考えを引き出したい。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
展開 10分	前時の復習【3(6)】	- JICA の支援である技術協力、円借款、無償資金協力について、その特徴を振り返る。 - 数名分の感想を聞き、他の生徒の学びや気づきを知る。	一斉	- パワーポイントを使い、タイにおける JICA 事業の写真を写しながら、前時の生徒の学びを振り返る。 - 前時の生徒の感想から、視点の良いもの、本時に繋がるものを選び、紹介する。	
	本時の MQ の提示【3(1)】	本時のゴールと身につけたい力を示し、見通しをもたせる。	一斉	国際社会の中での日本の役割とは？	
展開 32分	タイの APCD とヤマザキの協働事業の紹介【3(2)】【3(3)】	- 写真から、事業内容を想像し、ペアで話し合う。 - APCD (アジア太平洋障害者センター) と山崎製パンの協働事業を知り、本事業の意義を考える。	一斉 ペア	- 写真を数枚提示し、想像できるようにする。 - パン製造や販売だけでなく、経営アドバイスの提供等により、障害者の就業・自立支援の効果を高めることができたことを押さえる。 - 企業の強みと途上国の課題が一致しているか、確認しながら進めるよう促す。	中小企業海外展開支援事業の意義を理解している。【参加態度】
	【カードワーク】新潟県の中企業の取組理解【3(4)】	- 新潟県の中企業の 5 社 (A ~ E) の取組と途上国の課題を一致させるカードアクティビティを通して、事業内容を理解する。 3 種類のマッチングカード (ア. 中小企業名と会社の売り・強み イ. 途上国の課題、国名と国旗 ウ. 取組内容) を机上に広げ、カードの情報を読み取りながら、関連するものを見つけ、並べる。 - スライドを見て答え合わせをすると共に、説明を聞く。 - 班で興味をもった事業を選び、企業と対象国にとってそれぞれ何がプラスになるか (win-win の関係性) を	班活動	パートナー ★一方通行ではない！ ★相互依存の関係があり ★双方にプラスとなる！ (WIN-WIN の関係) 社会貢献 ヤマザキ基準のパンを 世界に発信！ 会社の可能性を広げる！ 多様な挑戦！	- 企業の強みと途上国の課題との繋がりを考えながら、アクティビティに参加している。【参加態度】 - 事業内容の全体像から、企業と途上国との相互依存関係を理解している。【ワークシート】

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

	【3(1)】	考え、ワークシートにまとめる。 ・それぞれの事業で、もし課題があるとすれば何があるかを想像する。【批判的な思考】	ら想像する。	【生徒の記述①】 <企業のプラス> ・社会貢献ができる ・視野が広がる ・経験を積める ・技術が向上する ・途上国との関係強化 ・製品や技術を海外に広められる ・企業の利益が上がる ・世界平和に貢献 ・可能性が広がる ・助け合える
	【生徒の記述②】<途上国のプラス> ・防災対策などの課題解決となる ・国民の命が救える・知識が増える ・農民の収入が安定する ・就業の場が増える ・技術者が増える・技術が向上する ・日本の安心安全な製品を輸入できる	【生徒の記述③】<考えうる途上国のデメリット> ・費用がかかる・言葉の壁があること ・正確に技術を教えないと間違った使い方をしてしまう ・途上国の環境に適していなければ意味がない ・途上国の同じ分野の製品が売れなくなる ・1からやらなくてはいいから時間がかかる ・天候によって収穫が左右するためそればかりに頼るのは危険 ・故障した場合、途上国で修理できないのでは		
展開 8 分	授業のまとめ 【3(6)】	・地元の中小企業の国際貢献の取組を振り返り、国際協力が身近であることを実感する。しかし、日本が行う支援の全てが途上国にとってプラスにならない可能性もあることを理解する。	一斉 ・パワーポイントで、「タイのエビ養殖による森林破壊」の写真を見せながら、環境問題、労働の搾取、支援の押し付け、持続可能性への疑問、などもありうることを押さえる。	環境？ 平等？ 持続可能？ 本当に、その国が必要としていること？
 上田の養殖場 高密度の養殖→ 病気が広がりやすい 抗生物質の投与 微生物死滅 土壌を汚染 環境破壊		・本時の MQ「国際社会の中での日本の役割とは？」について、自らの考えを記入する。 ・本時の感想を記入する。	一斉 ・企業の国際協力の貢献性だけでなく、支援の裏に潜む危険性など、多面的に考えさせる。	・国際社会の中での日本の役割について、自らの考えをもち、まとめている。【ワークシート】
実際の授業では、時間が足りず、MQ の答えと感想書きは宿題とした。		【生徒の記述④】<本時の MQ：国際社会の中での日本の役割とは？> ・技術や製品を輸出するだけでなく、それを相手国で維持・拡大・発展させていくための人材育成が必要。 ・技術面だけでなく、国民の安全や命に関することなど、日本のこれまでの経験を生かした支援をする。 ・外国と協力関係を築き、自国の技術を伝え、パートナーとして win-win の関係を築いていく。 ・途上国が存続できるもので支援する（持続的な発展につながる）・技術支援の工夫が必要。 ・製品の支援や設置だけでなく、正しい使い方、作り方、修理の仕方を教えるべきではない。		

(2) 授業の振り返り

山崎製パンと APCD の協働事業において、「慈善事業ではなく『パートナー』という関係でお互いに取り組んでいる」との説明を真剣に聞く生徒の姿から、発想の転換を迫ることができたという手応えを感じた。また、新潟県の企業と途上国のマッチングカードアクティビティでは、カードの種類・情報、共にやや多かったものの、高齢化対策、災害対策など様々な分野で新潟県の企業が貢献していると知り、生徒は誇りに感じたことが振り返りシートの記述から見て取れた。企業の取組のデメリットを想像させるのは難しかったが、「途上国では、製品が故障した場合の修理や部品の調達に難しいのではないか」など、鋭い考えを発表した生徒もあり、それらが他の生徒の刺激となったり思考を促したりし、意義のある発問となった。一方で、授業全体を通して教師の説明量や教材の情報量が多く、また指示や声掛けの仕方においても教師主導で進めてしまったことが反省点として残る。今後は、生徒が主体的に考え、話し合う必然性をどのように設定するかを検討するとともに、掘り下げて議論するための時間的余裕を確保する授業構成を考えたい。

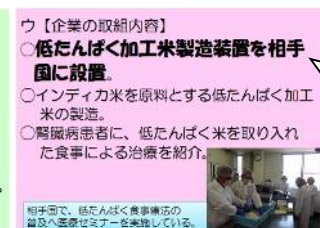
(3) 使用教材



ア
ホリカフーズ株式会社
新製品の開発
介護食などの加工食品・販売。
○専任の技術者、技術者が在籍。
○米をタンパク質にする技術。
○日本米だけでなく、インディカ米でも作ることも可能。



イ
タイ
【タイ情報】
○タイ国は、工業化国。
○農産物の加工業での輸出に成功。
【タイの課題】
○タイの米の輸出量は世界一位。
○近年タイは人口の増加により国内競争力が低下。
米の高付加価値化を国の政策として進めている。
○高齢化により、高齢者が急増。
→腎臓(じんぞう)病患者へのケアが必要。
※腎臓は、体の水分量を調節する働きを担っており、高齢になると機能が低下し、腎臓に負担がかかるという特徴がある。



ウ【企業の取組内容】
○低たんぱく加工米製造装置を相手国に設置。
○インディカ米を原料とする低たんぱく加工米の製造。
○腎臓病患者に、低たんぱく米を取り入れた食事による治療を紹介。
※相手国で、低たんぱく食事療法の普及へ意識を高める活動を行っている。

他、「プロテックエンジニアリングトルコ、トップ工業カンボジア、ワキヤ技研-インドネシア、雪国まいたけ-バングラデッシュ」の組み合わせで作成

(4) 参考資料等 マッチングカードを作成するにあたり、以下の web サイトを参照した。

・JICA「中小企業海外展開支援事業」<https://www.jica.go.jp/sme_support/>(10月)

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

※単元の目標に関する箇所に下線を引く

【1限の生徒の感想】『世界を知ろう』 「日本食はもはや日本産ではない」という言葉に、なるほど、と思った。<u>身の回りの多くのものが外国産に頼っていることに驚いた。</u> - 私たちは途上国の支えを受けて生活しているが、同時に<u>途上国の環境を破壊しているかもしれない。</u>多くの連鎖があるが、今すぐに解決できる問題ではないと思う。	【3限の生徒の感想】『国際協力について考えよう』 - ここまで多くの活動をしていることを知らなかったし、<u>日本が今までしてもらったことへのお返しもあるのだ</u>と思った。 - 様々な国が、<u>国境を越えて助け合う姿勢</u>がとてもいいな、と思う。小規模でも、それが技術を教えたりするものだったら、教わった人が<u>今度は教える側になって、どんどん広がっていく</u>のではないかな、と思った。
【4限の生徒の感想】『身近にある国際協力について知ろう』 - 新潟の企業がアジア諸国に技術支援をたくさん行っていることを初めて知った。食料支援なども大切だが、災害についての支援は今すぐにでも必要としている国が多くあると思う。中越地震や雪崩などを経験している新潟には、その<u>災害対策の支援はやらなければならない義務の一つ</u>だと思った。グローバルな世界で、<u>お互いが納得し合える貿易・支援</u>をしていかなければいけない。 - 日本と途上国の国際協力はたくさんあるが、<u>その協力で課題はないのか</u>、見直しを進めていく必要があると感じた。 - 自分たちに身近な技術が、様々な国で求められていることがわかった。国際協力には色々な方法があることを学んだ。 - 国際協力では、<u>パートナーという考え</u>が必要だと学んだ。一方的に良いことをしていると思っていても、相手国には悪影響があることもあり得ることを知った。<u>相手側の事情を考えることが大切だ</u>と改めてわかった。 - 佐渡でも障害者の方がパンを作る活動があることを知っていたけど、そういう活動が外国にもあるのだと思った。<u>援助活動を持続させるには、お互いに対等な関係であること</u>が必要だとわかった。環境や利益について見直ししていくことが大切だと思った。 - 私たちの知らないところで、<u>日本の技術が世界に広まって役立っている</u>ことを知ってすごく嬉しくなった。	
【7～9限 『佐渡未来ポスター』課題解決のための主な提案】 - 佐渡の雄大な自然を生かして・・・佐渡の絶景カレンダーを販売する、映画やアニメの大自然のシーンを再現する、等 - 佐渡に多くある神社・寺院を生かして・・・スタンプラリーを作る、伝統芸能の体験型イベントを企画する、等 - 佐渡に多くある空き家を生かして・・・個性あるお店に改装する、イベント会場にする、体験型民泊にする、等 →<u>佐渡オンリーワンのもの、今後残していきたいもの、大切にしていきたいものを生かしたアイデアが多くあった</u>	

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

1時限より日本と諸外国との関係性や戦後に日本が受けてきた援助について学習してきたため、4時限では、「日本の技術を世界へ広めることは責務である」のような意見が自然と生徒の中から出てきた。また、単元を通して国際協力についての知識や考えを積み上げたことから、佐渡の課題解決を提案する佐渡未来ストーリー作成で、「持続可能な開発の視点」を踏まえて、生徒たちは思考し、全班が工夫を凝らして具体的な提案をすることができた。更に、提案したことを実際の貢献活動として実行できたことで、生徒に「自ら行動を起こすことで社会へ働きかけることができる」と実感させることができた。生徒の取組やワークシートの記述から、単元の目標は概ね達成できたと言える。

一方で、特に3時限のように、資金協力など規模が大きく専門的な話題になると、意欲が低下する生徒が見られた。国際的な話題でも外国の人々に想いを馳せ、繋がりを自分事として捉えられるよう、現地の写真や映像を使用したり、日本との比較から気づきを促したりするなどの手立てを講じたが、十分ではなかった。各分野における国際協力の必要性を実感するためには、その国の経済、環境、政治等の背景を理解する必要がある。そのために、今後は国際理解教育を単発で終わらせず、他教科と連携して、横断的に継続して取り組んでいく。

本実践は、授業間の繋がりを意識させることとクラスを超えた意見交流となることをねらい、毎時間の冒頭で、前時の復習を行い、生徒の感想を3学年全クラスの中から数名分を提示したため、難しい話題でも生徒の意欲を喚起することができた。国際理解教育を特別なものと捉えず、どの分野とも繋がりががあるということを認識し、生徒自ら学びを深めていけるような土台を作りたい。そして、生徒が今後、答えのない問題を前にしても、あらゆる知識や経験と結びつけながら思考し、課題解決しようとする態度を育みたい。

10 教師海外研修に参加して

同じ志をもつ仲間たちや JICA 職員の方々との出会いから始まり、国際教育研究会や上越教育大学教職大学院の原研究チーム、地域おこし協力隊など多くの方々とのネットワークを構築することができた。「私自身がリアルな教材に」を目標に参加した教師海外研修であったが、得られた知見は想像以上に多く、その後もネットワークを通じて多岐に渡る学びがあり、本実践を成功させることができた。また、日常で情報を得る際、自然と国際理解教育の視点で教材収集をするようになったことも変化の一つである。今後は、教科の枠を超えた国際理解教育の実現のために、常にアンテナを張り、教科問わず国際的な視野をもちながら指導にあたること、自身の専門性を磨きながら、学びを周囲に発信し続けることに尽力していきたい。